

特別寄稿

ヒューマン・ケア研究における枠組み [II] *

—医療・看護・心理・教育・福祉介護などを抱括する「臨床学」構築への志向—

大阪教育大学名誉教授 上野 轟

目 次

5. 「人間の科学」における現象学的方法・視座の方法論上の意義
 - 1) 「人間の科学としての心理学が、他の科学と違って、“問う者と問われる者が同一の「我」・「私」であること”の解決至難な矛盾と二律背反」に対する生産的な対応
 - 2) 統合・統一の二重のもつ意味と意義
 - 3) 主客融合・統合した生活の現実を構成する主体としての「我」また「私」
 6. 「人間の科学」における現象学的方法の客観性に関する検討—主体的自我の「統合的主観あるいは統合する主観」をめぐって
 7. 医療・看護・心理・教育・福祉などを抱括する「人間の科学」に位置づけ「臨床学」構築への志向
- 結論

5. 「人間の科学」における現象学的方法・視座の方法論上の意義

1970年～80年代にかけて、人間性回復提唱の時代思潮の背景のもと、PittsburghにあるDuquesne大学の心理学者 Giorgi A¹⁾や精神病理学者 van den Berg J.H.²⁾らが中心となって、客観的な科学的な考え方偏重に対して、人間を問題にする医学、看護学、心理学、また社会学等経験的諸学の方法論に関する再検討を始めた。

そこでは、当該諸学の方法論を現象学の創始者 Husserl E. の現象学に据え、Husserl E. の現象にあるがままに、すなわち、「ここにあるものとして経験されるもの³⁾」を命題に、経験的現象学的方法 (An empirical phenomenological investigation) を

創始し、これを適用し、検討していく必要を提唱してきた。

そして、人の生活の文脈にそって、日常、直面する病気、自己偽瞞、犯罪被害などが、当該の人にとってもつ意味を解明する意味分析に取り組んできた経緯がある。

ちなみに、1993年、秋、3ヶ月の短期であったが、筆者は、機会に恵まれ、当時のDuquesne大学からCalifornia州立Sonoma大学へ移籍されていたJager B. 教授ご夫婦のご指導、お世話いただき、中の2ヶ月の間、Duquesne大学心理学部長 Knowles R. 教授、および、同大The Simon Silverman 現象学センター長 Rejcewic R. 教授のご指導のもと、乳がん患者との対話交流を通じてえた、とくに術後経過に関する現象記述資料を援用し、経験的現象

* 本学会の名誉会員であり設立メンバーの一人である上野轟先生からご寄稿いただきました。前号と本号にて掲載いたしております。1.～4.は前号をご参照ください。

学的方法への手ほどきを受けることができた。

終わりに、Sonoma 大学 Jager 先生ご夫妻のもとに戻ったとき、経験的現象学的方法が、関係存在としての人間との関係仕様に関わって、「その基盤が人格的に感受し合う対人・対話関係にある⁴⁾」ことを確認することが貴重な学びとなったのである。

帰国後、筆者の「病気像の変容による病気との和解に関する事例に経験的現象学的方法による意味分析の解明検討⁵⁾」を行ってきた。

引用文献

- 1) Giorgi A. (早坂泰次郎監訳)：現象学的心理学の系譜，勁草書房，1981.
Giorgi A.: Phenomenology and Psychological Research, Duquesne Univ Pr., 1985.
- 2) van den Berg J.H. (早坂泰次郎・上野矗訳)：病床の心理学，現代社，1990 (1975).
- 3) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳)：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学，中央公論社，1974 (昭和49)，p.243.
- 4) 上野矗：病床の臨床心理学—病気像と病気との和解，フィリア，2006，pp.12-15.
- 5) 上野矗：4)に前掲書，pp.141-165.

1) 「人間の科学としての心理学が他の科学と違って，“問う者と問われる者とが同一の「我」・「私」であること”の解決至難な矛盾・二律背反¹⁾」に対する生産的な対応

この解決至難な問題に関わって「主客分離に基づく自然科学的な客観的方法導入によって、心理学は解決至難な矛盾を解決し、没または脱主観性によって科学としての心理学の成立がはかられたとの主張がなされてきた¹⁾」。

そこでは、「心理学を外側に現われ見える行動

を対象とし、これを対象化し、客観的にながめ、観察することにより、個人の経験を越えた普遍性において認められ、経験の主観性は完全に克服される²⁾」としたからである。

言い換えれば、対象・行動・客観を対象化し、客観化し・ながめ・認識の客観化がはかられ、認識・概念・主観と対象・存在・客観との一致に至るものとするのである。

こうしたことも加わり、「客体的同一性としての客観性だけを客観性だと信じ、科学は没又は脱主観性なる法則の発見にあると明言してきた³⁾」。

だが、よく吟味・検討してくるなら、「科学の名のもと、観察し、実験し、概念と存在との一致という客観性だとの判断を為すところにも見られるように、科学は人間の営為なのであり、人間のこうした主観性を反映せざるをえないのは当然なことだと言わねばなるまい³⁾」。

「そこに、客観性である客体的同一性としてのモノや事柄のありようとかかわりなどに、大多数の人びととの間で一致した見解である集合的主観としての客観性を明確に置き、見とっていくことができる³⁾」からである。

この意味では、現象を対象化し、分析・説明するといった抽象化や概念は、あくまでも、その現象をより完全に理解し、より深く肉薄するための方法論的要請なのであって、抽象化や概念化それ自体が、科学としての権利を持つわけではない筈である。まして、そうした抽象化や概念化に現象を従わせようとするなどあってはならないのは当然である。

Van Kaam A. の示唆の如く「科学的とは、研究者の態度を言うのであり、それは現象学の命題“現象にあるがままに”みつめる謙虚さにある⁴⁾」とも言えよう。

ところで、われわれ人間は、客観的にながめるならば、確かに、成程、生体の側面、心理・精神の

側面、そして、社会的なところの側面を担っている。だが、かく相反し合う側面が人間という全体にモザイク的に組み込まれているわけではない。

ここで、もし、人間を真に全体として、その生活の現実と世界の只中において、より具体的に捉えようとするならば、言い換えれば、人間を存在そのものとして、その生活の現実の只中において、具体的理解を目指そうとするならば、客観的方法による対象化、客観視する場合と違って、問う者「我」・「私」が、どこでも、いつでも、同時に、問われる者であり、逆に、問われる者が、どこでも、いつでも、同時に、問う者であるということになる。

そこでは、なによりもまず、問う者も、問われる者も、同時に、同じ「我」・「私」である。それゆえ、問う者・私自身が自ら問うところから、問う者・「私」の問いが、自分自身への問いとして少なくとも成り立ちうるところから出発しなければなるまい。たとえば、このことは、警察官が泥棒を犯すとき、自他から厳しい批判にさらされることを見れば、容易に了解されよう。

問う者・「私」が、同時に、問われる者・「私」であることのこうした重要性にもかかわらず、「客体的同一性のモノの科学のもとでは、実りのない問いであるとみなし³⁾」、この問いの担う二律背反性の解決至難の矛盾を没または脱主観性をはかる客観化によって解消できるものと扱い、処理してきたのである。

そうした扱い、処理となった理由は、「能作しうる生を客観的科学では全く顧慮しなかったし、日常の世界が感性的意識であるのと同様に、学的世界が学的意識作用の意識対象であることに思い及ばなかったことにあった⁵⁾」からである。

さて、「原子物理学では、物質を人間の精神的な諸法則を通じて、つまり人間のひとつの可能的な対象として定義している⁶⁾。」したがって「私たちが自然を問うとき、それは、実は私たち自身を問

うことなのだ⁷⁾」。宇宙物理学者 Von Weizsäcker C.F.のこの言葉は、Husserl E.の上の指摘⁵⁾の通り、モノを扱う自然科学においてさえ、認識が、基本的に、自己了解に基づくことを言い当てているのである。

このとき、問いと問われるとの「我」・「私」とが同一であることは二律背反どころか、真実に迫る人間・その世界を開く上できわめて重要な鍵を意味してくることが明解されてこよう。

引用文献

- 1) 八木晃編：心理学Ⅰ，培風館，1967(昭和42)，p.12.
- 2) 城戸幡太郎：現代心理学—その問題史的考察，結論人間学としての心理学の問題，評論社，1951(昭和26)，p.258.
- 3) 早坂泰次郎：看護と人間—ヴァン・デン・ベルグに寄せて) van den Berg J.H.(早坂泰次郎・上野轟訳)：病床の心理学，現代社，1990(1975)，pp.148-150.
- 4) Van Kaam A.: Existential foundation of psychology, Duquesne Univ Pr., 1966, p.1.
- 5) Husserl E.(細谷恒夫・木田元訳)：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学，中央公論社，1974(昭和49)，p.126.
- 6) Von Weizsäcker C.F.(西川富夫訳)：自然の歴史，法律文化社，1968(昭和43)，p.178.
- 7) Von Weizsäcker C.F.(西川富夫訳)：6)に前掲書，p.195.

2) 統合・統一の二重のもつ意味と意義

かねてより、われわれ人間の発達・成長は未分化(統合・融合)→分化→融合・統合・統一のプロセスにあると言われる。またわれわれの人間像は、生体・心理、また精神体、そして社会体と分化された側面と分けられる。だが、そうしたいくつもの世界に自分を分裂させて生きているわけでは

ない。誰にとっても世界はひとつに融合・統合・統一している。各人がその生活の現実を生きるたったひとつに統合・統一した世界に肉薄することこそ、人の実りある現実的理解を目指すことが、「人間の科学」としての心理学の課題となろう。これが統合・統一の第1の意味である。

その際、われわれ人間は、理性的に考えたり、分析したり、モノを造り出したりするばかりではなく、喜びに舞ったり、悲しみにうちひしがれたりする。理性・知性の働きは、知的、静的、空間的、合理的かつ客観的だが、これと対置・相反するかのよう、情意の働きは、情意的、動的、時間的、非合理的かつ主観的である。

問う「我」・「私」が自身を問うことは、自身の理性的な働きばかりではなく、情意的な非合理的な働きをそのまま問い直すことを意味している。

しかしながら、対象化・客観化視によって、とかく、情意的で非合理的な自分を理性的な研究という楯に隠そうとしがちである。このとき、科学は「防衛の科学¹⁾」となって、科学であることを歪めてしまうことになろうからである。

そこに、主客分離に基づく二分法の思考法に伴う相剋、主と客との正邪選択による解決がからんでいることは間違いない。ここにとにかく、対置・相反し合う両極の統合・統一（もともとの主客融合・統合への回帰か）が問われてくる。統合・統一の第2の意味がこれである。

自然科学的科学観のもと、われわれは、日常、とかく、客観的方法によって、相反し合う両極のはざまに立って葛藤し、苦悩しがちである。そのあげく、二分思考法に依って、二者択一に迫られ、正とした極を選択し、解決がなって葛藤・苦悩から解放されるかと言えば、必ずしもそうとはならず、しこりを残していくものである。客観的で正しいと考える二分思考法が、もともと主客融合にある生活の現実適切であるか疑念が起るものだからである。

ところで、筆者の専攻の心理学には、人一般を対象にした一般心理学と、個を問題にする臨床心理学とがある。その際、臨床心理学は、一般心理学を基礎にした上での応用であるとの捉え方がなされている。しかも、科学的で学的関心の一般心理学が、個を問う現実的関心の臨床心理学よりも一段と高く評価されてきた経緯がある。主観と客観をいえば、主観よりも客観を重視する見解に偏っていることは明らかである。主客分離による二分思考法によって、二者択一の選択を通じて“客観”を“正”と取ってきたからである。

しかし、このとき、「我一意識を一意識す²⁾」との現象学的視座のもと、人が人に関わる心理学を初めとする諸学や職域では、一般と個および、基礎と応用、双方とも両者を峻別しえないところにある。

「基礎と応用」あるいは「学的関心」と「現実への関心」とは、もともと互いに関連した概念なのである。基礎が基礎であるのは、そのうえに何かは確実に築き上げられることによってである。同様に、自らの基礎を確認することのない応用は、本来、応用ではない。基礎と応用とは本来ひとつである。応用とは応えることであり、応えることは責任が伴うからである。

また、応用に当たる apply は、元来、結びつけるとの意味をもつ言葉であった。このようにみると、基礎と応用とは本来ひとつであった（第一義の統合・統一の意味）。科学が滲透して客観化の主客分離に基づく二分思考法によって、対置相反させられ、その相剋の克服解決解消に向け、もともとの融合・統合・統一へ回帰して行く。これが統合・統一の第二義の意味なのである。

同様の事情で、一般と個とは、これまでの自然科学的心理学では、とかく、相反し対置して考えてきた。

そんななかで、注目しておかねばならないのは、「法則定立的科学(一般)と個性記述科学(個)とを、

あたかも自然と精神とを自明の如く対立させ、形式的区別と質料的区別とを混同させたのは誤りである³⁾」とのRickert H.の指摘である。というのも、「ダーウィン主義をもって新しい歴史哲学とみなし、歴史文化科学のために自然科学を呼び求めることがしばしばある⁴⁾」ことを例示しているからである。

Rickert H.のこの所説は、丁度、医師が患者の診断に当たって、一方で、診断に基づく治療・治療をはかる科学的で客観的方法が求められるが、同時にインフォームドコンセントにみられるように個性化の対話が求められることを指し示している如くである。

また、Allport G.W.は「個を志向する科学の正当性を提言し、相反し合って緊張関係に陥りがちな「一般と個」の問題を、両者をいかに調和していくか、そして、いかに育つ人間のイメージをもたらす体系的折衷主義の方向へと導くか、これが開放的体系としての人間事象すべてを同じ決定論的方法で統一できるメタ理論という⁵⁾。」

その際、「法則定立的な手続きを利用しなければならないが、同時に何が独自で、何が一般であるかを説明するために必要な個性記述的な手続きを案出しなければならない⁶⁾」としている。

Allport G.W.のこうした指摘や提言は、「伝統的な科学的方法の要求と、人間の個性の豊かな認識の要求との間に起こる緊張関係の克服に向けて、科学的な定義が可能であり、しかも人間的な含蓄を所有し、形態の構造を正確に反映する概念を常に探究すること⁷⁾」を要請している。

Rickert H.やAllport G.W.らのこうした努力は、個に一般性があり、一般に個性があるとの人間の真実な全体像を見ているのであって、一般と個はひとつにしてふたつであり、ふたつにしてひとつであることを明らかにしている。

主客融合の思考法に依拠する現象学的方法・視座方法とこれに対置し、相反する主客分離に基づ

く客観的な二分思考に開ける自然科学的客観的方法との求められる統合が第二義な意味のそれである。それは「狭義の現象学的方法⁸⁾」ともいえよう。

あわせて、現象学的視座は、それに依拠する主客融合・統合・統一母体を担っている。この母体へ回帰していくのが、第一義の融合・統合・統一の意味である。第一義の融合・統合は「広義の現象学的視座⁸⁾」ということができよう。

引用文献

- 1) Maslow A.H. (早坂泰次郎訳)：可能性の心理学，川島書店，1971 (昭和46)，pp.64-71.
- 2) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳)：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学，中央公論社，1974 (昭和49)，p.243 (pp.243～245).
- 3) Rickert H. (佐竹哲雄・豊川登訳)：文化科学と自然科学，岩波文庫，1939，p.44.
- 4) 3)に前掲書，p.25.
- 5) Allport G.W. (依田新・星野命・宮本美佐子訳)：心理学における人間，培風館，1977，p.17.
- 6) 5)に前掲書，p.66.
- 7) Van Kaam A：Existential foundation of psychology, Duquesne Univ. Pr., 1966, p.1.
- 8) 上野轟：病床の臨床心理学―病気像と病気との和解，フィリア，2006，pp.12-15.

3) 主客融合・統合した生活の現実を構成する主体としての「我」また「私」

われわれ人間は「合目的的に、自律的に生きる多様の統一にある¹⁾」。そこでは、多様で、相反し合う属性を担いながら、人のうちにひとつに融合・統合・統一し、真に全体としての「我」・「私」というひとつの世界を抱き、生きている。

このとき、人を真に、全体として、この「我」・「私」というひとつの世界・生活の現実を生きるこ

とを可能にしているのが統合的主体・「我」・「私」なのである。

それは、恩師北村晴朗による「主体としての自我:Iという主語的存在・生活の担い手・他の主体と区別して体験するかけがえのない「私」・人・事物・事象を結びつける「私」・我を忘れても、何かをやらせる「私」・自らを知ることにおいてそれ自身を知る「私」を指す²⁾」。

また、Jaspers K. は、なかなか把握しにくい主体としての自我に関して、次の意識体験を通じて明確にしようと提示している。

1. 他者と画然と区別され、現実独立し、孤独な存在との意識(「第二次の青年期自我覚醒³⁾」と同質の意識一発達的に3歳児頃に現れる第一次自我の自覚・他者に反発する反抗に芽生えがみられる)

2. 能動性の意識一命令されても、するのはこの「私」という意識

3. 単一性の意識一善なる「私(Me)」と悪なる「私(Me)」とがあるが、「私」・(I)は依然ひとつであるとの意識

4. 同一性の意識一私(Me)は成長・発達もし、変容を遂げてきているが、「私」・(I)は依然変わらぬ「私」であるとの意識³⁾

主体としての自我は、このようにして、自分の全体像に「私」という統一性と一貫性を与え、自分に「私」という第一人称を与える認知者として、同時に、どのような生活の現実をつくり上げるか決定し、そこに住まう能動者としている²⁾のである。

われわれ人間の知的属性と情意的属性といった相反・対置し合う両属性がその人格のうちにひとつに融合・統合してあるとの特徴を折に触れ、指摘もしてきた。どうやら、われわれ人間のこうした相反・対置し合う両属性を調和的にひとつのうちに融合・統合するのは、主体としてのこの自我の担う融合・統合・統一の機能であるとみられる。わけて、Jaspers K. の3. 単一性の意識と、そして、

4. 同一性の意識とが関わる機能のように推察されてこよう。

あわせて、相反・対置し合う両極の融合・統合・統一が主体としての自我の機能とみるなら、両極の融合・統合・統一を介して、そこから全く新しい世界の開示が指摘され、(たとえば「病気との敵対ゆえの和解という世界の開示⁵⁾」)、生活の現実において実感・体験し、変わらぬ「私」を見取ってくる。このとき、Jaspers K. の4. 同一性の意識に象徴され、統合的主体「私」において、客体的同一性としてのモノの客観性と並んで、統合的主体としての主観における客観性のもつ意味の重要性が推察されてこよう。

いま、ここで「主体としての自我(I)⁶⁾」の統合・統一機能を「客体としての自己(Me)⁶⁾」のうちに見られる様相の一端を例示していってみたい。

まず、「客体としての自己」である「身体⁷⁾」(IがMeと意味づけた生体)に関わって、視覚において、相反し、対置する左右両眼の視差が輻輳作用によって、ひとつに融合・統合・統一すると、そこから奥行き視や立体視が創成される。

次に、「客体としての自己」である身体・心理・精神の統合・統一である人間の形成に関わって、生来(先天)か、それとも環境かとの二分思考法による見解は相反・対置する両者を人間の形成のうちにひとつに融合・統合・統一するとのStern W. による「輻輳説⁸⁾」の見解が創成される。

上に少し触れた「病気との敵対ゆえの和解にかかわる心理・精神に関して」、ここで少しく例示していきたい。

われわれはその病気をそれこそ人類の敵として見做し、医療のもと、診断に基づく治療・治癒(cure)が為され、その成果も上げてきている。しかし、場合によって、診^み立^たて通りに治療・治癒はかどらず、人は苦悩し、挫折感に陥るものであ

る。

その際、病気・(-) (負の意味で(-)と記号する)を、治そうと専心し、病気と敵対して闘い、これを打ち負かそうとする(これを正の意味で(+)と記号する)。このとき、病気(-)を治そうと専心するとき(+), 治療がはかどらず治癒がかなわないことがわかって人は苦悩し、挫折感に陥るのである。公式に表記すると $(-) \times (+) = (-)$ となるものである。

そんな心況のなかで、人は、病気克服の努力をここまで尽くしてきても、かなわないなかで、道理を悟る如く、あきらめ・諦念の気持ちに至る場合、また、病気を治せなくてもよいのではないかとの逆転の発想に転換がはかられる場合(「事例2^{9a)}」公式的に $(-) \times (+) \circ (-) \times (-) = (+) \rightarrow$), さらに転換 $(-) \times (+) = (-)$ となっている自分の源に、大事な自分(+)に病気(-)をかかえている自分があるが、これ以外の自分のありようがないとの覚知・気づきを得る場合(「事例1^{9b)}」と「事例3^{9c)}」公式的に $(-) \times (+) \circ$ 転換 $(+) \times (-) \circ$ 転換 $(+) \rightarrow$)などの場合がみられる。

「事例2^{9a)}」の場合、病気に対する治療・治癒の思考法の発想転換をはかり、また「事例1^{9b)}」「事例3^{9c)}」の場合、病気に対する治療・治癒の思考法から大事な自分が病気で苦しんでいるが、病気である自分はそれ以外のありようがないとの気づきを得て認識転換をはかる。

かくして、病気との敵対的にかわりようゆえに、そこから開いてくるのが、共有しているのは、苦悩する病気と共に生きること、病気との敵対ゆえの和解 The Living with Disease にあり、病気でありながらも、しかし、人間的に健やかなあり様を取り得る世界の開示でもあった。

病気との敵対ゆえの和解とのあり方と密接に関連して、東京大学名誉教授、故山本俊一先生の自体験を通じての提言「がんとの闘争的和睦(cureをcareのうちに統合したとの意味)」が注目され

よう。それは、先生専攻の衛生学に立脚し、ライフスタイルを免疫力増進に資させ、がんに負けない気概のもと、がんを怒らせず、これと和睦するつき合い方である¹⁰⁾。まさに闘争的和睦(care)の提言は、医学的論拠とあわせ、相反し合う両極の融合・統合・統一という現象学視座の核心をつく心性の機微に触れる所論であるからである。

最後に、人間の社会的関係に関わって、個(主観)と集団・組織(客観)という相反し合う両極が、その生活の現実において、ひとつに融合・統合してくる。

そこから「人間は、本来、関係存在としての個となる。このことが、臨床ということの意味において、臨床的なのである¹¹⁾」。

「そこでは、個は、社会(集団・組織)を通して育成され、生かされる。同時に、個は、社会に向かって貢献・寄与するといった様相が展開されてくる¹¹⁾」。

このとき、そこに働く基本的な人と人との関係の仕様は、既述の如く、第一次的で、人格的な対人・対話関係と、第二次的で、役割的で機能的な人間関係という相反し合う両関係が、その個のうちにひとつに融合・統合・統一して動いてくる。これは、まさに、野球で、投手が一球(人間関係)に入魂(対人・対話関係)し、投球されて、人間的な関係の仕様を通じて、個人と社会(集団・組織)との融合・統合が成って、そこから新しく生産的な個人・社会の創成が具体化されてこよう。

このとき、相反し合う両極を人間のうちにひとつに融合・統合する人間の姿という現象は、体験的に眼前にあり、それを前にしていながら、探究可能な領域を確定するべく、対象化の操作を加えるのは誤りなのであろう。

たとえば「心身統一という具合に人間存在を包括・融合・統合するのは、探究可能な領域を導く理念であっても、人間の経験的探究の対象とはな

らない¹²⁾」と言われる。抱括・融合・統合は対象化すると見えなくなってしまうからである。

それは、たとえば「顔の快活さの表出の認識は、身体と心とを分離せず、感ずるものは相互に関係する心身の二種類のものではなく、ひとつの全体なのである。この事実は世界を知る原初的原理である¹²⁾」。

そして、このことは、同時に、主体としての自我のもと、統合する主体の客観性のことを提起し、吟味・検討していかなければならないと考えるものである。

引用文献

- 1) Stern W.: Die menschliche Persönlichkeit, Verlag von Johann Ambrosius, 1923, pp.4-5.
- 2) 北村晴朗: 自我の心理, 誠信書房, 1962 (昭和37), pp.76-98.
- 3) Jaspers K. (内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田敬蔵訳): 精神病理学総論 (上巻), 岩波書店, 1959 (昭和34), pp.185-194.
- 4) Spranger E. (土井竹治訳): 青年の心理, 五月書房, 1973 (昭和48), p.48.
- 5) 上野 轟: 病床の臨床心理学—病気像と病気との和解, フィリア, 2006, pp.130-140, pp.141-155.
- 6) 北村晴朗: 自我, 北村晴朗編著: 一般心理学演習, 誠信書房, 1960 (昭和35), pp.170-172.
- 7) 市川浩: 精神としての身体, 勁草書房, 1975. 上野 轟: 5) に前掲書, pp.28-31.
- 8) Stern W.: Die menschliche Persönlichkeit, Verlag von Johann Ambrosius, 1923, p.95.
- 9) 上野 轟: 5) に前掲書, a) p.150, b) p.149, c) p.151.
- 10) 山本俊一: 肺がん三十年—がんとの上手なつき合い方, 真菜書房, 1995, pp.57-62.
- 11) 足立 穀: 現代人と組織—現代人にとって組織とは何か, 早坂泰次郎編: 20世紀人の心理学, 朝倉書店, 1971 (昭和46), p.174 (pp.172-175).

12) Jaspers K.: 3) に前掲書, pp.345-351.

6. 「人間の科学」における現象学的方法の客観性に関する検討—主体的自我(I)の「統合的主観あるいは統合する主観¹⁾」をめぐって

人間の科学における現象学的方法・視座の客観性の問題に関して、早坂の所論に習らい、専攻の心理学で学んだPoggendorffの錯視図(図6-1参照)を例示してみたい。そこに、人間の科学に関わって、その客観性、わけて「統合する主体としての自我が構成する²⁾」客観性が内包されており、興味深く、有意義性があり、重要であり、注目したいからである。

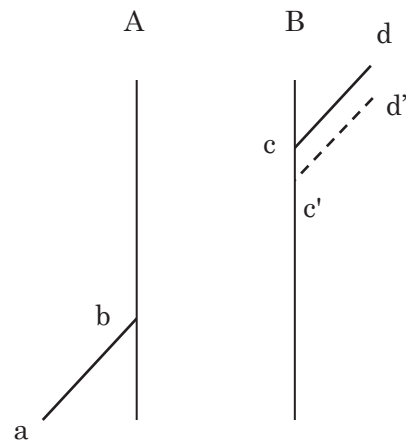


図6-1 ポッケンドルフの錯視図

上の図は、「A, B二本の平行線を、線分ab, cdが斜めによぎっているだけのものである。

見て言うまでもなく幾何学的には、線分ab, cdは一本の直線であるのに、われわれの眼には、むしろab, c'd'が一直線に見え、ab, cdは位置のずれた二本の線分に見えるので、錯覚と呼ばれる。われわれは、cc'の間隔を測定することができる。これを錯視量と呼んでいる。

Poggendorffのこの錯視図の場合、錯視量は、ABの間隔が一定ならば、abとAのつくる角度—勿論、cdとBのつくる角度に等しい—、及び

ab, cd を A, B の長さの2つ, とくに, たとえば, ab, cd を A, B と直角に交わらせてみると, もはや錯覚は現われない。それで, その角度, および, ab, cd の長さを決めることによって, 錯視量を予測し, 統制することができることを示し, 意味している³⁾。

このように「現象を測定によって, 錯視量を数量的に表現し, さらにこれを予測しうることは, 科学の客観性の究極的根拠であるとわれわれはこれまで信じてきたし, 現に信じてもいる。

しかし, そこで測定され, 予測される錯視現象は, 自然科学の場合と違って, 外界に客観的に実在してはいない³⁾。それは, 丁度, 虹がそうであるように, われわれが, その生活の現実で, 誰にでも, いつでも, 同じように現われ, われわれに見える。だが, 物理学的に実在しない。

「錯視は, 物理学的には, 幻となるが, 生活の現実においては, 実は, 正視であるということになる⁴⁾」。錯視というのは, 実際, 物理学的に ab, cd が一直線であるところに客観性を規準とするからなのである。

さて, この Poggendorff の錯視図およびその錯視を通じて, 人間の科学成立に関わる広義の現象学的視座 (5の2参照) で開ける客観性をめぐって, 次の3つの意味が区別されてこよう。

第一は, 主客融合・統合のもと, 主客分離に基づく自然科学における客観性である「客体的同一性⁵⁾」である。

これは, 既に, 折にも触れてきたように, Poggendorff の錯視図に見られるように, 線分 ab, cd が一直線であるとする場合である。それは, 「人がどう見るか, どうしたいかといったことに関わりなしに, モノがモノとしていつも変わらずに一同に—持ち続けている性質であるということができよう⁵⁾」。

第二は, 第一の主客分離に基づく自然科学的な客観的方法と相反し, 対置する狭義の現象学的方法における客観性である「集合的主観⁶⁾」である。

上の Poggendorff の錯視図による錯視は, われわれにとって, 物理学的客観性 (図6-1における線分 ab, cd の2本の線分が一直線である) を越えて, 線分 ab, c'd' の2本の線分が一直線であると知覚する・見ることは, 実は「いつ, どこでも, 誰でも, 見ると必ず同じに見えることで, これを集合的主観としての客観性であると言う。それは, 大多数の人々で一致した見解は客観的であることを意味している⁶⁾」。

現象学的視座のもとでは, これを「相互主観性 (人間的主観性の逆説: 世界に対する主観であると同時に, 世界のうちにある客観性であること)⁶⁾⁷⁾⁸⁾」, あるいは, 「間主観性⁶⁾⁷⁾⁹⁾」とも呼称している。

第二のこの客観性の意味は, きわめて重い重要性を担っている。それは第一の客観性である客体的同一性の問題に関わって, 見る主観と見られる客観 (モノ) との一致という判断は, 実は, 最終的には, 主体による判断であり, この集合的主観に依っているからである。太陽の廻りを地球が動くのを誰でも実際見た者は無いが, われわれにとって, この地動説は, 常識となっている如くである。科学とは, どだい, われわれ人間の生活現実の只中での営為であるからである。

Poggendorff の錯視図の検討を通して, これ (錯視図) を見るとき, そこに錯視図を構成するのにその現実におけるように, 第一の物理学的な客体的同一性である客観性が内包されている。そして, 同時に, 第二の集合的主観としての客観性が共在している。

そこには, 相反し合う客観 (モノ) としての客観性と, 主観 (認識) としての客観性という矛盾した特徴が共在している。われわれは, そうした矛盾した特徴を知りながら, そのことをそのまま承認し, 受け容れることによって, 初めて, この錯視

図を全体として理解する。この図についての最終的理解がそれ（錯視図）以外ないことは、誰でも認める他ないであろう⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾。

ここに、第三は、広義の現象学的視座が依拠する主客融合・統合に基づく「統合的主観、あるいは、統合する主観としての客観性¹⁰⁾」である。

Poggendorffの錯視図のこのような不条理な特徴：ab, cdが、客観的に、一直線に見えるところを見ることができないのは、物体としての図形自体に由来するのではなく、われわれ人間の見るという働きに由来する。すなわち、見るというわれわれ人間の働きを通じて、この図形は、実は、初めて、Poggendorffの錯視図となるのである。統合的主観の客観性の意味するのはこのことなのである¹⁰⁾。

かくして、Poggendorffの錯視図をわれわれ人間が見ることを通じて、統合的主観のもと、錯視が、真実、現われていないもの（錯視図）を見ることによって、現われ出て見えてくる真実、言い換えれば、統合的主観としての客観性（集合的主観・相互主観性、また、間主観性にも関わるが）にあることになる。

このことは、「見えるものが現われていないものから出ていることを悟る（ヘブ11章3節）」と語られ、神への信仰による神への真の存在が覚醒されることを告げている。

ここに、主観性の主観性なる客観性ともみられる宗教的な心性とも密接に関連して人為一人・対話的かわり合いで「私」である身体¹¹⁾を通じて働く「介護の目利き¹²⁾」、心理臨床の「直感や勘」また「感受性¹³⁾」といった世界への着目が、人間の科学における重要性をわけてその客観性としての「統合的主観¹⁰⁾」、あるいは、「統合する主観¹⁰⁾」のことが注目されてこよう。

そこでは、徹底的に矛盾し、どんな説明も寄せ付けないような背理を目の前にしても—Poggendorff

の錯視図に内包される客体的同一性と集合的主観との相反・矛盾を目の前にしても、揺らぐことのない「主体としての自我¹⁴⁾」—わけても「自我の自己同一性の意識：自分は一貫していつもどこでも自分自身である確実感¹⁵⁾」、これの基盤の上に初めて成立するのが統合的主観、あるいは、統合する主観としての客観性なのである。要は、「統合的主観とは、かく、知られるもの・対象と、知るもの自己自身との関係に気づくことにある¹⁰⁾」とすることに尽きよう。

引用文献

- 1) 早坂泰次郎：看護と人間—ヴァン・デン・ベルクに寄せて, van den Berg J. H. (早坂泰次郎・上野轟訳：病床の心理学, 現代社, 1990 (1975), pp.152-155.
- 2) 北村晴朗：自我の心理, 誠信書房, 1962 (昭和37), pp.76-98.
- 3) 早坂泰次郎：1)に前掲書, pp.146-147.
- 4) 早坂泰次郎：1)に前掲書, p.153.
- 5) 早坂泰次郎：1)に前掲書, p.148.
- 6) 早坂泰次郎：1)に前掲書, pp.149-152.
- 7) Husserl E. (細谷恒夫・木田元訳)：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学, 中央公論社, 1974 (昭和49) pp.256-260.
- 8) 新田義弘：自己性と他者性一視点のアポリアをめぐって, 新田義弘・宇野昌人：他者の現象学—哲学と精神医学からのアプローチ, 北斗出版, 1982, pp.11-34.
- 9) 川野健治・圓岡偉男・余語琢磨・太田俊一・木戸功・橘弘志・原知章・三嶋博之：間主観性の人間科学—他者・行為・物・環境の言説再構にむけて, 言叢社, 1999.
- 10) 早坂泰次郎：1)に前掲書, pp.152-155.
- 11) 市川浩：精神としての身体, 勁草書房, 1975, p.79.
上野轟：病床の臨床心理学—病気像と病気との和解, フィリア, 2006, pp.28-35.

- 12) 川野健治：介護における行為の協調関係について
一食事介助場面の検討，川野健治他9)に前掲書，
pp.181-203.
細馬宏通：介護するからだ，医学書院，2016.
- 13) 上野轟：「勘」の臨床心理学の方法論的意義一涙に
関する臨床心理学的研究(1)及び(2)をもとに，大阪
樟蔭女子大学学術研究会，人間科学研究紀要，
2006，No5，pp.25-33.
上野轟：臨床心理学への方法論における「勘」の意
義と機能，大阪樟蔭女子大学学術研究会，人間科学
研究紀要，2007，No6，pp.25-33.
上野轟：臨床心理学における援助をめぐる一論考
一心理臨床の経験を通じて，大阪樟蔭女子大学学
術研究会，人間科学研究紀要，2008，No7，pp.37-
45.
- 14) 北村晴朗：自我の心理，誠信書房，1962.（昭和37，
pp.76-98.
- 15) Jaspers K.（内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡
田敬蔵訳），精神病理学総論（上巻），岩波書店，
1959（昭和34），p.192.

7. 医療・看護・心理・教育・福祉などを抱括す る「人間の科学」に位置づけ「臨床学」構築 への志向

筆者は，本節題に至る自分の研究史を学的問題
史に関わらせて，拙いながら，いささかな検討・
考察を加え，残されている時間のないここで，将
来展望を拓く一条の光としようとした。

80歳に至る我が人生を振り返ってみると，本節
題と不思議とも感じられる妙なる機縁との出会い
の実感のうちにある。

昭和12年秋，病虚弱児で誕生。大学3年生当時，
死病と言われた肺結核に罹患。抗結核剤開発，開
花の期に恵まれ，休学2年で回復・復学。その後，
学部・大学院時代，恩師北村晴朗先生の指導のも
と，病気・病者に関する心理学的研究に携わる。

この間，医療・看護からの応援を得，育成されて
きた。

人間性回復や心身医学の成立といった時代思潮
を背景に，病気・病者の心理学的研究の稀少さも
加わり，赴任した白梅学園短期大学，弘前大学養
護教諭養成所（小中高の保健室勤務の教諭の育
成），そして，大阪教育大学教育学部特殊（障害）
教育学科（日本で唯一の病虚弱教育の4年制教員
養成課程の設置がなされた）の教職と取り組み，
病気・病者の心理学に関わる研究・教育の職とに
恵まれた。最後に大阪樟蔭女子大学大学院臨床心
理学研究科創設に携わる。この間，関係の医療，
看護，教育からの応援のお蔭が大きく，心理臨床
の研鑽に励みになってきたのも実際に，感謝の念
ひとつに尽きる実感にある。

72歳で第一線を退き，後期高齢に入った。し残
していた自分の病床の臨床心理学の仕上げに励ん
で，積み重ねていく過程途上，体調不良に陥って，
この間5年間は入退院を繰り返す日々であった。
高齢化に伴う荒波に遂に抗せず，全く気づかずに
いた既往の脳梗塞の後遺障害のため，思いもしな
かった介護Ⅰ認定のもと，整形外科リハビリ週2
回，計5時間，介護施設におけるディケア週1回，
5時間の介護を受けるに至り9か月を経過，今日
80歳にならんとする時であった（編集委員会註：
2016年に原稿をいただいております）。お蔭様で，
歩行困難が寛解途上にある。

当初，介護ケアを受ける自分に衝撃を受け，痛
く自尊心が傷ついたのも実際であった。体験参加
の折，思いがけず，関係スタッフ，そしてお仲間（利
用者）がそろって，こんな自分を無条件に受け容
れ，歓迎して下さった心に触れ，傷ついた出血が
止まり，癒される自分を実感した。

このとき，これまで，絶えず，専ら意識的に援
助する側にあったが，初めて，援助される側に置
かれ，しみじみ，援助は，されて，初めて真にす
ることができることの気づきに打たれ，万感こみ上

げてくる大波に洗われたのである。

こみ上げてくる万感の大波に洗われながら、「される側・者」と「する側・者」との相反し合う両極が、ひとつに融合・統合しうる人間的な関係実現、つまり方法論的に克服すべき課題として具体化したいものだと考え、動き出してきたのである。

このとき、筆者は、ひとりの人間として、もともと、方法論的根拠に「関係存在としての個人、また、関係存在としての人とその生の現実」にあるがままの姿を置き、見るとき、これを臨床的方法と称し¹⁾、「臨床社会学又臨床社会心理学への着想の提言もなされてきた²⁾」ことに応じたように「障害児臨床学において、人間学的アプローチを提言してきた³⁾」ことが甦ってもくる。

勿論、医療・看護・心理・教育・福祉は、それぞれ各専門領域・目的対象ではそれぞれに異なる。だが、しかし、方法論的には、その基盤に、対人・対話関係と、その外面に役割的で機能的な人間関係とが各人のうちにひとつに融合・統合した人間的関係の展開がはかられ、わかり合い、共有し合い、わかち合う共通土俵の上にのっているからである。

そこでは、する側自らが積極的に、ひたすら、その個人の内面的意味体験世界に触れ、感受し、相互にわかり、わかり合い、わかち合おうとする「される側・者・“あなた”中心のアプローチ」がはかられる。臨床的方法の意味することがこれである。

その際、しかしながら、臨床は、とかく、医学や医療での領域規定のもとで、医学の専門用語として、通常、理解され、通用している。

だが、上述の如く、人間が本来関係存在であることを基盤に、人間の生活の現実にあるがままに接近する方法論上(現象学的視座のもと)、臨床という用語が用いられてきた経緯がある。

ところで、筆者は、白梅学園時代、短期であったが、首都圏の良さを実感し、仲間が首都圏を離れない理由も、わかった気がしたのも実際であった。

ロールシャッハ・テストの片口安史先生とお会いできたり、新宿に設置されていた内村祐之先生の神経研究所附属晴和病院で、心理臨床実習の機会に恵まれた。ケースカンファレンスの折、内村先生が声をかけて下さり、“上野君、僕は神宮で投手、石橋君(東北大学医学部精神科教授で学部の精神医学の講義を受講していたとき、“僕が内村君のボールを受け取っていた”との話をされていたことが甦った)が捕手をしていてネ!”と親しく、励みの言葉を下さった。“頑張ろう”と感激・感動した覚えが甦ってきた。

また同窓の大先輩である立教大学社会学部教授の早坂泰次郎先生の研究室に現象学的方法の研究に参加する機会に恵まれた。

このとき、社会福祉学の教授で、立教大学のチャップレンでもいらした岩井先生から、臨床という言葉の意味を教えられ、眼が見開かれる思いを覚えたものである。

岩井教授は言われた。

「臨床」は医師が患者の病床に臨み、病める個々人の病気を診断し、それに基づく治療・治癒(cure)をはかることだと受け止められている。

しかし、同時に、余り知られていないが、臨床には、もともと、次のような意味が担われていると言われる。

臨床とは、人が病いの苦痛を経て、いよいよ、死に臨むとき、死への恐怖や不安におののくたましいを鎮め、支え、励まし、なぐさめ、そして、癒す(care)、究極的には、神との出会いへと導く聖職者の使命につながっていくのだと言う。

臨床が担うこの意味は、各専門領域中心のCure=人間関係的あり方・視座と、患者・被教育者・

利用者中心の Care= 対人・対話関係的あり方・視座と相反し、対置し合う両者をひとつに融合・統合してあるということを指し示している。

そして、その方法論的基盤となるのが、「人間と人間⁴⁾」との人間的なる関係—人間関係の土台に對人・對話関係を据え、ひとつに融合・統合した関係—にあることを示している。

思うに、臨床は、かくて、方法論上、丁度觀念論と實在論との対立を解消させ、主客二分法による主客分離の思考法から主客融合・統合の思考法へと轉換した現象学的視座・方法と通じ合えるように見受けることもできよう。

引用文献

- 1) 早坂泰次郎：大学紛争の心理学，早坂泰次郎編：20世紀人の心理学，朝倉書店，1971（昭和46），pp.15-18.
- 2) 足立勲：現代人と組織—現代人にとって組織とは何か 早坂泰次郎編：20世紀人の心理学，朝倉書店，1971（昭和46），pp.174-175.
- 3) 上野轟：障害児をどうとらえるか—人間学的アプローチ，高木俊一郎監修，猪岡武・村井潤一編：障害児臨床学，福村出版，1983，pp.45-57.
- 4) Travelbee J.（長谷川浩・藤枝知子訳）：人間対人間の看護，医学書院，1974.

結論

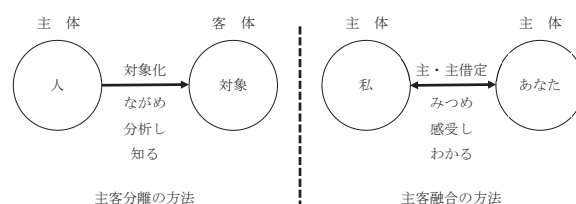
医療・看護・心理・教育・福祉・介護などを抱括する「人間の科学」として臨床学構築への志向，それは、人間的な理解・援助を統合的に実現するため、その方法論的基盤を、対人・対話関係—つまり狭義の現象学的方法に該当する—と人間関係—自然科学的客観法に該当する—とを研究者という人格のうちにひとつに融合・統合する人間的な関係の成立と展開—広義の主客融合に基づく現象学

的視座に該当する—に据える。（図結-1および2）¹⁾

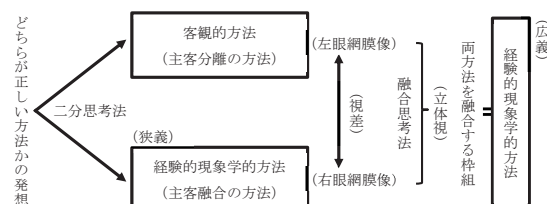
そこでの中核的舞台となるのは、こころとからだとがひとつに融合・統合した「身体」²⁾であり、同時に「私（研究者）」と「あなた（被研究者）」との対話交流とその積み重ね、「相互行為」³⁾「協調関係」⁴⁾にある。

「そこでは、常に、お互いに、相手の次の問いかけや反応対話（行為）を推察し合う。しかし、かしい身体は、姿勢・仕草・感情・意志など伝達意味を発信すると同時に、これらを感じ、わかれろとしわかるのである」⁴⁾⁵⁾。これが、よく言われる「目利き」⁶⁾であり、「勘とかコツ（骨）」⁷⁾などと言われる。これは、上に検討してきた統合的主観、あるいは、統合する主観としての客観性に該当する心性なのだからである。

ここで、わけて注目したいのは、Jaspers, K. がいうところの、たとえば心身の統一・統合は、これを「統合の探究領域を導く理念として認識されるが、心身統一・統合それ自体を経験的探究の対象とすることができない」⁸⁾との所論の重要性にもかかわらず、「我—意識—を意識す」⁹⁾のもとで、この統一・融合・統合の姿が、あたかも、Poggendorff の錯視図において、錯視という融合・



図結-1 主客分離の方法と主客融合の方法



図結-2 客観的方法と経験的現象学的方法の位置関係

統合・統一の姿像・客観性を見て取ることができ
る。それは、客体的同一性と集合的主観との相反・
対置し合う構成のもとに、ひとつに、まさに、融合・
統合・統一する主観を通じて見開かれてくる客観
性にあるということであった。

かく、主観的にして主観的な融合・統合・統
一する主観が見開く客観性の世界（たとえば例示
した病気との敵対ゆえの和解を初め、目利き、勘
やコツ（骨）などなどの開示する世界）への科学的
探究への認容が問われてこよう。

ちなみに、城戸が示唆された「主観性における
客観性の認容をしなければならない」こと、すな
わち、それは意味であるというとき、ここに到達
した「融合・統合・統一する主観」に由来してくる
ことが示唆されてもこよう。

引用文献

- 1) 上野 轟：病床の臨床心理学―病気像と病気との和
解，フィリア，2006，pp.12-13.
- 2) 市川 浩：精神としての身体，勁草書房，1975.
上野 轟 1)に前掲書 pp.25-35.
- 3) 細馬 宏通：介護するからだ，医学書院，2016，p.15.
- 4) 川野 健治：介護における行為の協調関係について
―食事介助場面の検討，川野 健治・圓岡 偉男・余
語 琢磨・太田 俊二・木戸 功・橘 広志・原 知章・三嶋
博之：間主観性の人間科学―他者・行為・物・環境
の言説再考に向けて，言叢社，1999，pp.181-203.
- 5) 細馬 宏通 3)に前掲書 pp.217-219.
- 6) 細馬 宏通 3)に前掲書 p.259.
- 7) 上野 轟：「勘」の臨床心理学の方法論的意義―涙に
関する臨床心理学的研究(1)及び(2)をもとに，大阪
樟蔭女子大学学術研究会 人間科学研究紀要，
2003，5，pp.25-23.
上野 轟：臨床心理学の方法論における「勘」の意義
と機能―内田康夫氏の作品を臨床の現実と見立て
ながら，大阪樟蔭女子大学学術研究会，人間科学研
究紀要，2004，6，pp.25-33.
- 8) Jaspers K. (内村 祐之・西村 四方・島崎 敏樹・内田
敬蔵訳)：精神病理学総論(上巻)，岩波書，1953(昭
和38)，pp.345-351.
- 9) Husserl E. (細谷 恒夫・木田 元訳)：ヨーロッパ諸
学の危機と超越論的現象学，中央公論社，1974(昭
和49)，pp.243-246.
- 10) 城戸 幡太郎：結論 人間学としての心理学の問題，
現代心理学―その問題史的考察，評論社，1951(昭
和26)，pp.261-262.